**How to make better decisions**

私たちは、不十分な情報しか与えられていない状況下で、思い込みや偏見で物事を決断しがちです。相手の事を大して知らないのに好きか嫌いの判断を下したり、過剰な自信で自分は成功すると思いこんだり。

上記をスポットライト効果と言い、スポットライトに当てられた箇所以外の影を無視してしまいます…そこに色んな情報が眠っているかもしれないのにも関わらず。

決断を下す時に何を信じるべきか？

多くの企業は分析に時間を掛けて決断をより良い物にしようとします。しかし、決断をした後の分析では、もし決断が間違っていたら？と言う部分を考慮していません。思い込みや偏見によって下された決断と合致する情報を見つけるために情報を探して、その決断以外が見えなくなってしまっているかもしれません。

だからこそ、大事なのは決断を下すまでのプロセス、過程です。ちゃんとした過程があって下した決断を、分析する事こそに意味と効果があるのです。

５成功している企業を見てみると、過程の方が分析よりも６倍重要だと言うデータが出ました。

この本では良い決断を下すための、過程に着目し、いかに過程を良くするかと言う所を述べております。

**決断を邪魔する４つの障害**

これかこれと言う考えて方では無くて、これとこれの両方をするにはどうすれば良いかと言う考え方をする事が大事です。

とある会社がデザイン会社を雇おうとした時に、幾つもあるデザイン会社の中からこれかこれならこの会社だなと一つの会社を選ぶのではなくて、全ての会社を選ぶにはどうしたら良いか？と考えたわけです。

とある会社はデザイン会社を雇う目的のプロジェクトを段階分けし、最初の段階で全てのデザイン会社を試しました。それにより、色んなデザインを見て、比べる事が出来ただけではなく、色んなデザイン会社の人と話す中で業界の事を知れたり、デザイン会社は競合していると知った時には競争心がより良いデザインに繋がる動機にもなったわけです。

**最初の障害は狭い認識です。**

人は選択肢を狭く取り、二極化して考えがちなのです。

**２つ目の障害は認識バイアスです。**

人は自分が既に信じている事柄に対して、それを支援する情報を無理やり探そうとし、信じている事柄と違う情報は無視しがちです。

３つ目の障害は短期的な感情です

感情が決断の邪魔をし、まともに現実を見れなくなっている事です。

インテルの社長であったグローブ氏は、コア事業であったメモリーを撤廃するかどうかを悩んでいました。それは短期的に、メモリー事業から撤退する事でどれほどの反論や社内政治への影響を考えてしまい、長期的にインテルを繁栄させるために必要な撤退と言う判断が下せずにいました。

**Ｍ**そこで、グローブ氏は「外部の人間だったらどうするか？」と言うような観点を変えた考え方をし、メモリー事業から撤退する決断を下す事が出来ました。

**４つ目の障害は自信過剰です。**

人は未来について、自分が思ってるようになると考えがちなのです。未来はどんな時も想定外な出来事に溢れています。

**４つの決断プロセス**

１．選択肢を見つける。しかし、狭い認識により少ない選択肢の中から選びがちである。だからこそ、選択肢を広める事が必要になる。

２．選択肢の分析。認識バイアスにより、ひいき目で見ている選択肢の良い情報だけを集めがちである。信じれるデータを集める事に注力し、外の考えを取り入れる。

３．選択。短期的な感情に流される事により、間違った選択をしがち。決断する前に一旦、距離を取る。

４．選択した選択肢で生活する。しかし、未来への過剰な自信が躊躇に現れる。間違った時の準備をしておく。

**２１Ｍ**人からアドバイスを貰う。感情が入っていないのが利点。

２２バイアスを解除する事は出来ないが、バイアスが発生した後にそれを無効化する事は出来る。